慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	徐大粛著 金進訳『朝鮮共産主義運動史一九一八 - 一九四八』
Sub Title	Dae-sook Suh, The Korean communist movement 1918 ~ 1948
Author	小此木, 政夫(Okonogi, Masao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1972
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.45, No.6 (1972. 6) ,p.115- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19720615-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

徐大粛著　金進訳
『朝鮮共産主義運動史　一九一八―一九四八』

一

第二次大戦後の朝鮮半島に生じた南北朝鮮の分断は、朝鮮戦争の例をあげるまでもなく、その後つねに東アジアの国際政治における大きな不安要因となつてきた。しかし分断状況にある南北朝鮮の実情を内部から体系的に解明しようとする試みは意外に少ない。とくに北朝鮮の共産主義にかんする研究の遅れは、その理由のいかんにかかわらず、決定的ともいえるほどである。

ここに紹介する徐大粛博士の『朝鮮共産主義運動史　一九一八―一九四八』(The Korean Communist Movement 1918-1948, Princeton University Press, 1968)は、必ずしも今日の北朝鮮共産主義の諸問題を直接扱つたものではない。しかし、同書は朝鮮共産主義運動を、沿海州やシベリアにおけるその起源から朝鮮解放後の時期に至るまで体系的に分析しており、また金日成の抬頭についても極めて信頼度の高い論証を行つている。これは今日の北朝鮮共産主義の研究にとつても、欠くことのできない貴重な貢献であるということができよう。

本書の主題は明快である。その第一は、誕生以来の朝鮮共産主義運動と金日成の抬頭との間に、歴史的・組織的な断絶があることを具体的に論証することにある。著者は、解放以前の朝鮮内外における朝鮮共産主義運動の担い手である古参共産主義者と金日成を中心とする新しい共産主義者とを明確に区別し、現在の「北朝鮮の共産主義者たちは、過去における朝鮮共産主義運動とは無縁」であり、「彼らは一九四五年に帰国してから、ソ連の援助のもとに、この運動において生残つた一握りの指導者たちを抹殺することによつて権力を掌握した」、と断言している。

本書の第二の主題は、金日成の抬頭を許した古参共産主義者たち

の敗北の原因を明らかにすることにある。著者は最終章で、彼らの敗北の直接の原因となった、解放後の朝鮮における彼らの戦術的な失敗をいくつか指摘している。しかしながら、彼らの敗北の最大の原因は別のところに求められている。著者はそれを古参共産主義者自身のなかに、すなわち一九一八年以来の彼らの革命運動のなかに求めているのである。五部一〇章からなる本書の大部分は、この朝鮮解放までの古参共産主義者たちの革命運動の分析にあてられている。

しかし残念なことに、評者はいまだに本書の大部分を占める解放以前の朝鮮共産主義運動について、本格的な研究に取組んだ経験をもたない。それゆえ、著者の尨大かつ細心の研究に軽率な評価を加えることは尊大であるといわなければならないであろう。したがって本稿では、著者の論旨にそって本書の内容を紹介し、それに基づいて、解放以後の北朝鮮共産主義の問題に若干の考えをめぐらすにとどめたい。

二

本書は既述のように五部一〇章から構成されている。そのうちの前四部八章が古参共産主義者たちの革命運動の歴史的分析にあてられている。

第一部　国外におけるはじまり　一九一八―二四
第一章　国外での最初の努力　一九一八―二〇
第二章　上海派とイルクーツク派の争い　一九二〇―二四
第二部　朝鮮における闘争　一九二〇―二八
第三章　朝鮮における最初の努力　一九二〇―二七
第四章　流産した統一戦線　一九二五―二八
第三部　党自立の終焉　一九二八―三一
第五章　朝鮮における党の崩壊　一九二八―三一
第六章　国外総局の失敗　一九二四―三一
第四部　外国共産党の下で　一九三一―四五
第七章　朝鮮と日本における共産主義者
第八章　中国および満州における朝鮮共産主義者

著者はこれらの部分の検討から、古参共産主義者敗北の要因を導きだしている。それはつぎのようなものである。

(一)、共産主義指導者間の分派主義
(二)、共産主義イデオロギーにかんする基礎的訓練の欠如
(三)、コミンテルンとの間の効果的かつ持続的関係の欠如
(四)、運動にたいし十分な指導を保障できなかったこと
(五)、警察の監視に対抗する効果的な行動路線を発見できなかったこと

第一の分派主義の弊害は、海外における初期の共産主義運動の展開のなかに、イルクーツク・グループ（イルクーツク付近の朝鮮人移住者で大部分はロシア国籍を取得していた――コミンテルン極東事務局代表シュミアッスキーの支持をえた）と上海グループ（沿海州地方のロシア化

帰化しない朝鮮人革命家――李東輝を中心とする幹部は、一九一九年上海の臨時政府に参加した）との抗争として、すでに現れていた。この両派の抗争は、一九二一年六月には武力衝突にまで発展した。シュミアツスキーの下で勢力を拡大したイルクーツク・グループがアレクセイエフスクで李東輝支持の武装力を急襲した事件で、のちにアレクセイエフスク事件と呼ばれるものがそれである。

分派主義の弊害はまた、派閥抗争が党の崩壊をもたらした第三次共産党の時期（一九二七・二八年）にも顕著であった。しかもこれらの分派抗争はイデオロギー論争を抜きにして行われている。これは朝鮮共産主義運動の驚くべき特徴であるということができよう。著者は、彼らの党派心はイデオロギーではなく、朝鮮人社会にみられる地理的因襲に基づくものであるとしている。地理的結合の因襲は、イルクーツク付近に移住した人々が沿海州地方のロシアに帰化しない朝鮮人革命家と対立するというように分派主義を形成したのである。

しかしまた著者は、分派主義の弊害を誇張しすぎることにも警戒している。第三次党を除けば、党は各グループの連合によつて（たとえば第一次党）あるいは指導権を一つのグループが掌握して（たとえば第二次党の火曜会第四次党のM・L派）結成されている。また党の自立が終焉した国外総局の時期（一九二四―一九三一年）には、とくに満州総局にみられるように、様々のグループがそれぞれの区域をもつて共存し、各区域間の争いは活動を妨げるほど激しいものではなかつた。さらに東京の日本総局は、派閥抗争がまつたく存在しなかつたが、やはり崩壊せざるをえなかつた。これらが著者の指摘する点である。

古参共産主義者を疲弊させた分派主義以上に重要な要因は、彼らが共産主義イデオロギーについての基礎訓練に欠けていたことである。彼らが革命運動を支える強力かつ適切な理論を提示できなかつたことは、しばしば運動の目的を曖昧にし、その方向を混乱させた。この欠陥は、著者によれば、統一戦線の提唱（一九二六年）と外国共産党との合併（一九三一年以後）の際にとくに顕著に現れた。民族主義者との統一戦線の提唱は、第二次党の崩壊ののち、日本から帰国した留学生たちによつて福本イズムの影響の下に行われたが、民族主義者との協力の必要性も、統一戦線のなかの共産主義者の役割も明確な論拠をもつて主張されたわけではなかつた。また福本イズムが朝鮮にも適用できる理由を説明しえたものは一人もいなかつた。このような傾向は、外国共産党との合併の際にもみられた。国外の総局は、総局の存在そのもののイデオロギー的誤りに気付いて解散したのではなく、外国の党と合併することによつて敗北の痛手を軽減しようとして解散したのであつた。共産主義者たちは、「一国一党」論を正当化することも、念入りに仕上げることもしなかつたのである。

著者が指摘した古参共産主義者敗北の第三の要因は、彼らがコミンテルンとの間に効果的かつ持続的関係をもつことに失敗したことである。しかしこの点については、コミンテルンの側の無関心かつ冷淡な態度にも責任がある。著者の明らかにしたところによれば、

アレクセイエフスク事件まで、コミンテルンは彼らが資金援助をしたグループと彼らの機関がその強化に力を注いでいたグループが二つの異なる分派であることに気付かなかつた。また事件後も、一九二一年一一月の指令では上海グループを支持しながら、翌年四月の指令ではイルクーツク・グループを支持する有様であつた。コミンテルンはまた、古参共産主義者を支持する試みを何度か行つているが、多くの場合、あまりに微弱かつ時期を失していた。一九二八年、コミンテルンから朝鮮国内の共産主義者に、いわゆる「一二月テーゼ」が送られたが、その時朝鮮ではすでに第四の党が崩壊していた。

第四、第五の要因は、いずれも日本官憲の厳しい弾圧と関連している。不断の追求によつて多くの指導者が検挙され、共産主義者たちは十分な指導を保障することができなかつた。また多くの場合、彼らは弾圧にたいする対抗手段を発見できなかつたばかりでなく、未熟かつ早まつた戦術によつて自滅したのである。

著者はさらに、以上のような歴史的要因に加えて、古参共産主義者敗北の直接の要因として、解放後の朝鮮における彼らの戦術的失敗をあげている。著者の指摘によれば、ソ連軍の金日成支持は明らかであつたが、それは必ずしも古参共産主義者抬頭の道を閉すものではなかつた。金日成の急速な抬頭を許したのは、解放後の古参共産主義者が犯したいくつかの戦術的誤りであつた。そのうち一つは、古参共産主義者たちが中央における政治的栄達に熱中し、地方共産主義者の指導を怠つたことであり、また大衆のなかにある彼らの政治的基盤の強化を軽視したことである。他の誤りはより明白かつ重大であつた。それはソ連軍の北朝鮮解放後、古参共産主義者たちが直ちに北半部に移動し、北朝鮮の政治に積極的に参加しなかつたことである。むろん彼らが北朝鮮に移動しても、ソ連軍の占領下では、成功は必ずしも保障されていたわけではなかつた。しかし著者は、「成功の機会ははるかに多かつたであろうし、新参共産主義者の昇進をもつと遅く、困難にしたかもしれない」としている。結局彼らは革命運動に敗れ、いままた解放後の権力闘争に敗れたのである。

著者はまた第五部第九章で、もう一つの主題である「朝鮮における共産主義運動の歴史の非神話化」、すなわち金日成の東満州における抗日ゲリラ活動の解明に挑み、金日成らの抗日活動と古参共産主義者の革命運動との間には明確な組織上の断絶があることを検証している。著者が確認した事実はつぎのようなものである。

(一)、金日成の抗日活動は、東北抗日連合軍として知られる中国共産党指揮下の中国軍部隊のなかで遂行された。

(二)、金日成の軍事活動にかんする記録は、一九三五年五月の日本警察の報告に遡ることができる。当時金は東北人民革命軍（東北抗日連合軍の前身）第二軍第一中隊第三支隊長であつた。

(三)、金日成は一九三六年一月、結成された東北抗日連合軍の第二軍第三師団長であつた。同軍は同年中に再編成され、金は第一路軍第六師団長となつた。

(四)、日本軍の厳しい討伐戦にあい、第一路軍は一九四〇年三月、

周保中指揮下の第三路軍に加わるため小規模ゲリラ集団に分散した。しかし第三路軍はすでにソ連領ハバロスクへ後退し、金日成も一九四一年一月、一〇〇名から一二〇名の部下を率いて同方面へ撤退した。

(四)、一九三六年五月、金日成が創設したと主張されている祖国光復会は、正しくは「在満韓人祖国光復会」であり、これは共産主義者の組織ではなく民族主義者の組織であつた。

この時期の金日成の経歴については、今日なお不明な点が多い。しかし著者は、上記の諸事実の確認に基づいて、金日成が中国軍部隊のもとで戦い、共産主義者として中国共産主義者の位階を昇進したこと、彼の活動経歴は朝鮮共産主義運動とは結びつかないことなどを適確に指摘している。むろんこのことは金日成が間違いなく朝鮮人であり、共産主義者であり、日本軍と戦い、満州でかなり重大な勝利を収めたことを否定するものではない。また彼の活動経歴は、たとえ中国軍部隊のもとであつたにせよ、解放時三三歳の青年としては驚くべきものである。しかしながら、これらの点を考慮してもなお、著者による「朝鮮共産主義運動の非神話化」の試みは明らかに成功したといわざるをえないであろう。

三

以上みてきたように、本書には二つの主題があつた。そのうちの一つは朝鮮共産主義運動の歴史的分析であり、そこから古参共産主義者敗北の要因を探ろうとするものであつた。他の一つは現在の北朝鮮共産主義と過去の朝鮮共産主義運動との間の歴史的断絶を扱つたものであつた。このうち前者については、著者は問題をほぼ論じつくしているといつてよいであろう。しかし後者がその後の北朝鮮共産主義に及ぼした影響については、本書の扱う範囲のため、著者は必ずしもすべてを論じつくしたわけではない。ここで評者が本書の成果を踏まえて、その問題に若干の意見を述べることは、必ずしも著者の意思に反するものとはいえないであろう。

評者は本書を読んで、この歴史的断絶の問題がその後の北朝鮮共産主義をいかに規定したかについて、ある種の感慨を抱かざるをえなかつた。それはいいかえれば、断絶が継続以上に重大な影響を後世に及ぼすことにたいする一種の驚きの念でもあつた。朝鮮革命の指導者としての、金日成による「抗日武装闘争」の神話、一九五〇年代からみられる自主性の強調によるナショナリスト金日成のイメージ強化などは、果してこの断絶の問題と無関係であろうか。いうまでもなくこれらは、いずれも解放後の北朝鮮における党内外の様様な問題が絡みあつて生れたものである。しかし神話の創造と自主性強調の出発点には、明らかにこの断絶、すなわち金日成の朝鮮共産主義運動の正統な指導者としての経歴の欠如の問題が存在する。そしてまたそれ以上の問題は、このような金日成の努力それ自体が、結果的にみて、彼の指導する北朝鮮共産主義の形成に著しい影響(たとえば金日成の個人崇拝的傾向)を与えていることである。これはそのまま今日の北朝鮮共産主義の特性につながる問題であるといえよう。

また解放後の北朝鮮にみられる激しい党内闘争も、この断絶の問題によるところが大きい。激しい党内闘争は、必ずしも朝鮮共産主義運動の分派主義的伝統にのみ起因するものではない。なぜならば、金日成による指導権の掌握は、彼が朝鮮共産主義運動にとっての異邦人であっただけに、他の多くの正統な指導者たちの犠牲のうえに成し遂げられなければならなかったからである。ここに断絶がもたらしたもう一つの悲劇の種が存在した。「一将功なって万骨枯る」の諺を想わざるをえない。

（コリア評論社、一九七〇年発行）　（小此木政夫）